

死生観考える

医療・介護目指す岡山大生グループ

寝たきりの家族がいたり、医療・介護現場で働くことを目指す岡山大（岡山市北区津島中）の学生有志が「生死」について語り合うグループ「めめも会」をつくっている。座談会を開いたり、医療現場などを見学して意見交換。死を見詰めることで生きる尊さを考え、自らの生き方を見直す契機にもしている。（平田亜沙美）



同大学院社会文化科学研究科で死生観の歴史を研究する本村昌文准教授らが「普段避けがちな死生観について気軽に話し合える場を」と、学生に呼び掛けたのが結成のきっかけ。今年4月に立ち上げ、医学部保健学科、薬学部、文学部の計10人で活動し

生と死をテーマに話し合う
「めめも会」のメンバーら

ている。グループ名は「死を思え」を意味するラテン語「メント・モリ」から名付けた。

意見交換を中心に2カ月に1度の割合で会合を持ち、「『死』を怖いと思うか」

看護現場見学や座談会

「自分らしく生きるとは」などをテーマに議論してきた。

生や死が身近な看護現場の見学も行った。10月には在宅緩和ケアに携わる看護師赤瀬佳代さん(37)＝岡山市南区福田＝の話から、死期が迫った人と家族の関わり方について勉強。赤瀬さんは「その人らしい最期を迎えられるようサポートしている」と語った。

今後は死生観をテーマにした講演会の開催なども検討。代表の文学部4年時本麻衣さん(23)は「誰にでも必ず訪れる『死』について考えるのは大切な心の準備。最期をどう過ごすのか、自分はいかに生きるのか、自分はいかに生きていきたい」と話した。